よわつよ！

やきごはん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リッテン王国、その外れにあるオルトリンデ村。

そこに産まれたノエル。

産まれながらにして持ちし魔力は、王国お抱えの魔術師とほぼ同等レベルであった。

しかし、彼の性格は非常に内向的で、消極的。

その性格が幸いし、彼の行動範囲は家の庭が精一杯。親に連れられ村の店に買い物に行くことも。多々あったが。

故に、その魔力を使うことなく、もっと言えば気づくことなく、生活していた。

転機が訪れたのは、ノエルが１２歳の時だった。

目次

0章　幼少〜少年期

始まり　1
捜索　5
逃走　11
目をつけられて　18
家捜　22
研究所　28
作戦　33
トラウマ　38
選択　42
脱出　46
聖都　50

1章　学園一年目

親　55
目指すべきもの　59
修行　65
物語は動く　69
出会い　73
早速　79
決闘へ　84
戦闘開始　88

0章　幼少～少年期

始まり

リッテン王国　オルトリンデ村　4月1日

ノエル　12歳

母、アリアからその知らせは聞いた。

フェリスが帰ってきていないと。

フェリスは、同じ村に住む2歳歳下の女の子。ノエルとは違い、元気いっぱいで、いつも村のあちこちで遊んでいるらしい。

そんなフェリスが、18時を回っても家に帰ってこないので、フェリスの親は村の人達に捜索の協力を仰いだ。

そうして、ノエルの家にも話が届いた次第だ。

「ロラン！　うちの子を探すのを手伝ってくれないか!?」

ノエルの父、ロランに頭を下げるフェリスの父。ロランは勿論！　すぐ準備する、と言いながら立ち上がり部屋の中へと消える。

少しすると、軽装備に包まれたロランが姿を現す。
「冒険家だったお前が力を貸してくれるとなれば、百人力だ。ありがとう！」
「気にするな。それより、手がかりはあるのか？」
ロランは久し振りの剣の感触を確かめながら、確認する。
「最後に見かけたのが、森に一番近い家の人だったから、恐らく森で迷ってるとは思うんだけどな……いかんせん、暗くて」
そうか。と考える表情をするロラン。
と、ふいにこちらに目を向ける。
「ノエル、一緒に行こう」
「……え……」
突然のことに目を見開き、一歩後退りながら父を見る。
「ノエル、お前の光球が役に立つんだ。それに、たまには外の世界に触れていかないとな。もう12なんだから」
こんな状況で、外の世界を体験させるなんて言うロランもロランではあるが。彼が冒険者であったことを考えれば、強ちおかしいとも言えないのである。
ノエルはそれでも行きたくはないと言おうとした。
光球は暗くて怖い森で人を探すために覚えたんじゃない。母アリアが、怖がりだった

ノエルに1人でも怖くないように。少しでも怖さが無くなるようにと。教えてくれた唯一の魔法である。

ノエルの肩にぽすりと手が乗る。

「ノエル、フェリスちゃんはきっと。暗い森で、怖くて、心細い思いをしているはずよ。私が貴方に教えた理由も、怖がる貴方を支えたかったから。今度は貴方が、フェリスちゃんを支えてあげる光になって?」

アリアがノエルに優しく語りかける。

「お父さんも居るし、他の村の人も居る。それに家には私が居る。貴方の居場所は何処にでもあるわ。だから、怖くなんてない。安心して」

語りかけながら抱きしめる。

恐怖に強張っていたノエルの顔が少しずつ和らいでいく。

「ノエル、行けるか?」

差し出されたロランの手を握る。

「よし、ノエルの勇気。父さんは受け取った。今度は父さんがノエルを全力で守るからな」

そう、夜の森には魔物が潜んでいる可能性もある。

フェリスが魔物に襲われている可能性も。

急ごう！　と、ロランに手を引かれながら森へと向かう。
勇気は出したけど、やっぱり寂しくて。怖くて。
名残惜しそうに母の方を振り返る。
なんだか、悲しい顔をしていた母を、その時の僕はどうする事も出来なかった。

捜索

オルトリンデ村　南側山麓

辿り着いた時には、当たりは完全に暗くなっていた。
松明を掲げる村人達。それぞれが山へと入り、捜索を開始した。
ノエルも父ロランと共に山へと入る。ロランは軽装備な事もあり、他の村人よりも奥の方へと入っていく。
探す事数十分。
少しずつ、村人の発する声が遠ざかっていく。
不安になり、ロランの袖を掴むノエル。
ロランは離さないと言うかのように、手を握った。

何かが聞こえた気がした。
父の方を向けば、同じようにこちらを見た。
声の方へと駆け寄れば、そこにフェリスはいた。

そして、闇に紛れた５ｍはある、巨大な熊もいた。

「俺の後ろに隠れろ、ノエル」

父の声が聞こえる。

ノエルはその言葉を聞くよりも早く、後ろに隠れてはいたが。

その様子に気づかないほど、ロランは目の前の状況に集中していた。

いや、するしかなかった。

（あれ程の熊――見たことないぞ――）

山に入れば、確かに熊などの獣はいる。

魔力を帯びた魔獣もいる。

だが、この熊はそんな帯びたレベルではない。全身の毛が紺色に染まり、目は紫、熊というより魔物のような声ならざる声を発している。

ロランは思考する。
ロランと熊を挟んだ間にフェリスはいる。
フェリスは怯えて腰が抜け、声も出ない。
熊からのプレッシャーは凄まじく、一歩でも動けば向こうも襲いかかってくる。
それに、ノエルもいる。
俺が仮にフェリスの手を引き、こちらへ逃げても、その間にノエルに襲い掛かられたら対処出来る気がしない。
何とか、時間を稼げれば……

そうか。

「ノエル」
父の言葉に反応し、見上げるノエル。
「光球、使えるか」

目眩し。
これなら、少しの間時間を稼げる。

それに、ノエルは今自分の後ろ。熊にしか影響は出ない。

ノエルからの返事がない為、再びノエルの方を見るロラン。

手は震え、今にも崩れ落ちそうなほど膝は笑っていた。

「ノエル、お父さんは。フェリスを助けたい」

「……っ！」

「怖いのは父さんも同じだ。だから、お前の光球で安心させてくれよ」

「!!」

「大丈夫、実態の見えないお化けよりは、相手がどこに居るか分かってる今の方が怖くないだろ？」

ノエルはふとフェリスを見る。

フェリスは、口をガタガタ震わせながら、必死に何かを伝えようとしている。

助けて――――

フラッシュバックするのは、フェリスとの記憶。
何度も何度も、家に押しかけては庭に連れ出されて遊ばされた記憶。
一言も喋らなくても、何もしなくても、彼女は怒らなかった。
むしろ、彼女の方から進んで話をしてくれた。何かを与えてくれた。
そんな、思い出。

ノエルの目が変わった。
それは、ロランに伝わった。
「合図をしたら、光球を出してくれ。この暗さだ、いつもの大きさで構わない」
こくりと頷く。
「3……2……1……今……！」
ピィキィンとノエルが光球を発動する。
辺り一面が明るく照らされる。
それと同時に、ロランは駆け出し、フェリスを脇に抱える。
熊はあまりの眩しさに目を眩ませて――――

いない。
それと同時に、熊も駆け出し、ロランへとのしかかり
「ノエル!!!!」
父の絶叫を聞いた瞬間、目の前から何か物体が飛んでくる。
抑えられることもなく、そのままその物体と共に後ろの木へとぶつかる。

そして、何かが踏み潰される音を聞いた。

逃走

オルトリンデ村　南側山中

木にぶつかったことで、一瞬気が飛びそうになったが、ドシン！　という音で意識が覚醒する。

目の前には巨大な熊。

だけ？

「お父さん……？」

熊の足元から赤い血が広がっていく。

――――――――!!

「お――――い!!　大丈夫かー!!!」

と、後ろの方から声が聞こえる。
光球の光、そしてこの地響きに気づき、村人がこちらへ向かってきている。

「……ノエ……ル」
下からも声が聞こえた。
ぶつかってきた何かは、フェリスだった。
まだ、恐怖に染まった顔で、でも、何故か僕の頬を触ろうとして。

「ノエル君!!」
声の主はフェリスの父だ。
ノエルがフェリスを抱えていることに気付く。

「フェリ…………っ!!」
そして目の前にいる熊。そして、地面に広がる血に気付く。
その血が誰のものなのかも。
そして、今何をすべきなのかも。
「逃げるぞ!!」
フェリスを肩に担ぎ、ノエルの手を引く。
―――う――
山を走る。走る。
―お―――ん―
後ろからはドシンドシンと、恐ろしい敵意が迫る。

――――――――と――――――――

「くっ……追いつかれる……」

必死に逃げるフェリスの父。

あと少し。

この先にある崖は、高さが２ｍほどある。しかし、真下は田んぼで今は水が入り、多少の怪我で済むはずだ。

――――――――!!!!!

ノエルを握る左手に痛みが走り、その反動でノエルを離してしまう。

「ノエル君!!!」

慌てて手を伸ばすが、殺意の風が彼らを吹き飛ばし、崖の下の田んぼへと落下させる。

フェリスを抱き抱え、何とか自分の背中で着地する事に成功した父であった。が、田

んぼからも見えた。巨大な熊が立ち上がり、ノエルが居るであろう場所へとのしかかろうとしているのを。

ぁぁぁぁぁぁぁああああああああアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!

空気が震えた。
目の前が真っ白になる。
娘のフェリスを抱え目を瞑る。
轟音と共に爆風が襲いかかるが、幸運な事に瓦礫などは飛んでこなかった。

音が止んだ。

暫く経って目を開けてみれば。

「……へ？」

崖はない。
木もない。
山もない。
ただ、視線の向こうには、リッテン王国領域外の野原が広がっていた。

そして、ただの凸凹とした土地となった山跡地の土が動き。
中からノエルが這い出てきた。

「……ノ、ノエル君？」

事態の把握が出来ない。
ただ、目の前にいるノエル君は生きている。そして熊は消えている。その二つの事実

から、フェリスの父はノエルの元へと駆け寄った。

目をつけられて

3日後

ロランの葬式は慎ましく行われた。

遺骨は無かったが、それを責めるものは誰もいなかった。

あの日、何が起きたかを村の人は知らない。

ただ、突然南側の山が全壊したこと。奇跡的にノエルが生還したことしか。

ただ、何が起きたかを知っている人がここにいる。

オルトリンデ村を統治する、貴族グランド家。

領主オーヴェン・グランドは、あの日の様子を秘書のガティから聞いている。

「つまり、あの山の崩壊はノエルとかいうガキが起こしたと?」

「ええ、アルファベアーが彼に襲いかかる寸前、彼の体から莫大な魔力が放出されたのを確認しています」

「なるほどな……ちっ。危険分子の居なさそうな村を選んだってのに」

「見る目が無かったですね」

「なっ……!?」
「冗談です」
「はぁ……まぁ良いさ。そのガキ、あいつのとこで使えそうだよな」
「そうですね。あれ程の魔力があれば、彼の研究はまた1段階先へと進むかと」
「よし、なら明日。あのガキを手に入れる」
「貴方様1人で大丈夫でしょうか、彼の魔力は相当なものですが」
「お前は？」
「私はこの屋敷のあれやこれやをやりますので、手が空いておりません」
「その割には毎日暇そうだが……分かった。レンブルを呼べ」
「かしこまりました」
一例をすると部屋からガティが出て行く。
1人になったオーヴェンは窓の外を見ながら呟く。
「あのガキも気になるが……その母親も……」

母は泣いていた。僕も泣いた。
優しく逞しく、大きな暖かさにもう触れられない。

村の人達はノエルとアリアを気遣うように、ロランが死ぬ前と何も変わらずに接してくれている。
悲しいのは誰もが同じ。だから、村の人達は2人に少しでもいつも通りを与えたかった。与えるしか無かった。

4月5日　オルトリンデ村　ロラン宅
朝早くにベルが鳴らされる。
アリアは隈を抱えた目を擦りながら、ドアを開ける。
「おはよう。ノエル君に会いたいのだが」
オーヴェンはアリアを一瞥しながらそう言い放つ。
後ろには鼻までネックウォーマーを付けた、男が同じくアリアを見ていた。
「ノエルは……今は寝ています。お帰り下さい」
母の目はオーヴェンを見ている。
オーヴェンはそのプレッシャーに後退りそうになるが、背後にいたレンブルに合図を送る。
「かはっ……！」
その瞬間、アリアの鳩尾にレンブルの拳が入る。

衝撃でヨタヨタと後ろへ下がり、置いてった花瓶にぶつかる。

パリン――

そして、尻餅をつくアリアを尻目に2人は家へと乗り込んだ。

家捜

ノエルはすぐ見つかった。
一番奥の部屋の隅で縮こまっていた。
オーヴェンは彼の魔力の強さを知っている。
だから、慎重に近づこうとするのだが。
「お、おい！　レンブル！」
レンブルはお構いなしに近づくと、怯えているノエルを掴み上げ、壁に投げる。
ドンという音と共に、ノエルはずりずりと背中と壁を擦り合わせながら落ちる。
「馬鹿！　そいつは……！」
ノエルの何かが揺れ動いた気がした。
そのタイミングをレンブルは逃さなかった。

ググググ――――――ドサッ――

ノエルはそのまま地面に横たわった。

「今のは無力化の魔法か？」
「そうです。ガティさんから話は聞きましたが、彼はその巨大な魔力を自由には使えなさそうでしたので」
「何故あいつは俺にそれを言わない……」
「まぁまぁ。これで良いんでしょう？」
　気絶しているノエルをオーヴェンに投げ渡す。
「おっとと！　投げるな！」
「はいはい」
「まぁこれで良い。行くぞ」

　と、廊下の向こうでアリアが立ち塞がる。

「息子を離して下さい！」
　先ほどよりも殺意の篭った目で2人を見つめる。
　その視線を受け、何かを考えるオーヴェン。

睨み合うこと数秒。

「奥さん、あんたもなんか怪しいんだよ」

「っ!?」

「だが……あいつのとこガキしか受け付けてねぇし……」

オーヴェンは一般の母親が発せられる殺意ではないと感じる。

同時に、ノエルの潜在的な魔力の話と加味すると、この母親にも秘密があるはず。

この母親を見逃せば、またどこかで子供を作るかもしれない。それは厄介だ。

俺は、楽に搾取したくてこんな辺鄙な村に家を構えているのだ。

それに。と、横にいるレンブルを見る。

レンブル。こいつは俺の家の者ではない。

フリーの何でも屋だ。

貴族からの依頼があれば遺憾なくその力を発揮してくれるが、要求する金が高い。

今回もガキを攫うだけで、５００万かかっている。

「はぁ……レンブル。あの母親を殺せ、と言ったら?」

「２０００万で」

「クソが……」

そこまでしてあの母親を殺す理由があるか……？
待てよ。子供を産まれたら不味いから、娼婦やどっかの貴族に売りつけるわけにはいかない。万が一があるから。かと言って野放しもダメ。殺すにはアホみたいなお金がかかる。正直言えば、俺の家はこんな所に構えたせいでそこそこのお金しかない。一気に２０００万も気前よく払えるわけが無い。
「おい、レンブル。同じく無力化なら？」
「うーん。１０００万」
「高え……なら、この女を
言い切る前に目の前の女がこちらへ襲いかかる。
顔面に重い一発を食らったオーヴェン。
慌ててレンブルに指示を出す。
「１０００万払う！　早く！」
「はいはーい」
ググググ――――――ドサッ――――――
アリアはその場に倒れた。
レンブルはそれを抱えると家を出る。
そしてアリアもオーヴェンを投げ渡した。

「おいっ!!　お前が持ってけ!」
「１００万」
「４ね!!!!!!」

その一部始終を村の幾人かは見ているかと思うが。
そんな事はなかった。
ガティのスキル。透明化により、オーヴェンとレンブル、そしてアリアとノエルは周囲から認知されなくなっていた。

「はぁ……はぁ……疲れた……」
屋敷につき、抱えていた２人を降ろす。
ガティが冷たいお茶を持ってきてくれていた。
「気が利くな」
ゴクリと飲めば、乾いた喉に染み渡る。
「透明化はどうでした?」
「完璧だ」
「ありがとうございます。４００万です」

「お前も４ね!!!!!!」

研究所

ノエルが目を覚ますと、見知らぬ天井が見えた。
ベッドに寝ていたため、そこから起き上がり、ドアへと向かおうとするが、鎖に繋がれていてドアには届かない。
すると、ドアが開く。
「おお、目が覚めたか」
目の前には白衣を着た若い男がいた。
「……」
「怖がる事はない、私達は君の力を少し貸してもらうだけなのだから」
「……お母さんは……」
「ん？　君の？　知らないな、ここに来るのは子供だけだからね」
「……」
ノエルは事態が飲み込めず混乱しているようだった。
それを察した男は、ある程度のあらすじを語る。
「君は、オーヴェンさんから売られて、このマグナイ研究所へ来た。そしてこれから、研

究に付き合って貰うって訳だ」
そう言うとまず、足と手を縛りつけてから、鎖を外す。
よたつくノエルを台車に乗せ、どこかへと運び始める。

運ばれてきたのは、白い大きな部屋。
左右に3個のカプセルがあり、そこからコードが伸びて中心のカプセルへと繋がっている。
その中の一つに入れられる。
「さぁてと。これはマグナイ先生からの仕事だ。君の魔力はいかほどのものか見せて貰うよ」
ガコンと、レバーを倒せばノエルの入ったカプセルが稼働する。
少しずつ中にいるノエルから魔力を吸い取ろうと、体内の魔力へと刺激を与えて行く。
刺激されたノエルの魔力は、ノエルの意思に反して外へと噴出する。
噴出して噴出して噴出して噴出して噴出して噴出して――――――――
「やばいっ！」
慌ててレバーを戻す。

「な、なんだこの子……」
「はぁ……はぁはぁ……」
カプセルから出されたノエルはかなり消耗していた。
そのまま台車に乗せられ、先ほどいた部屋とはまた別の部屋へと運ばれた。
そこにはノエルの同じくらいの子供達が３人居て、トレーに乗ったご飯を食べていた。
「ここでご飯を食べて。３０分後にまたくるから」
男はどこか慌てた様子で、ノエルをご飯部屋に残すと走り去る。
「あんな子は初めてだ……！　早くマグナル先生に伝えなければ……!!」
机の一つに、誰も手をつけていないトレーがあった。
ノエルは未だふわふわした感覚のまま、そこに座る。
（お母さんはどこ……助けて……）
と、横に座っていた金髪の少年が話しかけてくる。
「君も、犠牲者に？」

「……？　……犠牲者？」
「ああ、何も知らずに売られたのか。可哀想に」
　ため息をつくと、こちらを向きながら話を続ける。
「ここに送られてきた子供は、他の子供よりも多くの魔力を持つ子ばかり。だけど、色々な原因で、売られてしまった子。そして、ここでその魔力が枯れるまで搾り取られる。だから、犠牲者って言うのさ」
「……」
「あ、自己紹介がまだだったね。俺の名前は、カリプス。産まれながらにして人の心を読める力を持っている。それが故に、親からも恐れられ、高い金と引き換えに売られた」
「……そうだ、１―１０の中で好きな数字を頭の中に思い浮かべてみて」
「え……？」
「いいから」
「う、うん……」
　戸惑いながらも頭の中に８を思い浮かべる。
「８だね」
「!!」
「はは、凄いでしょ。というか、８を浮かべた人は君が初めてだけどね」

そう話していると、正面の席で食べていた銀髪の女の子が話しかけてくる。
「ねぇ、貴方はどうしてここに？」
「そんな事よりまず自己紹介じゃない？」
銀髪の女の子は２人いた。
瓜二つ。
違う点といえば目の色が黄か緑か。
「確かに！　君の名前をまだ聞いていなかった」
カリプスも賛同する。
「ノエル……」
「私は、イリス」
「私が、エリス」
そういうと、２人がノエルのトレーを指さす。
「食べないと」
「もうすぐ部屋に戻される」
そう言われて、ノエルは慌てて目の前の食事を食べ始めた。

作戦

「マグナル先生、彼は凄いですよ！」
「ああ、ああ！　これなら、すぐ様アルファベアーの第二試験を始められるぞ!!」
「どうしますか？　明日にでも抽出を？」
「いや!!　今日だ!!」
「今日ですか!?」
「ああ！　漸く捕まえたのだから、早く使わねば損だ！」
「わ、分かりました。早速用意をしてきますね」

２０分後。
再びカプセルに入れられたノエル。
カリプス、イリス、エリスも入れられている。
「始めろ!!」
「はい！」
レバーを倒す。

４つのカプセルから魔力が抽出される。
一際大きな魔力を抽出していたのは、ノエルのカプセルだったが。
噴出し続けると、少しずつノエルの意識が朦朧とし始める。
不安になり、他の皆んなを見るも、既に気絶してカプセルの中で項垂れている。
無理矢理。魔力を放出させれば体が防衛しようとして、体内の機能を止める。その結果が、気絶だ。

「おお、おお!!　ここまで耐えている!!　しかもこの量!!!!　素晴らしいぞ!!!!!」
中心のカプセルの中に、少しずつ何かが形作られていく。
「本当だ……もうアルファベアーのコアが!」
「ああ!!　これなら、３回も抽出すれば、アルファベアーの元を作り出せるぞ!!」
形作られていく姿は、どこかで見た気がして。

アルファベアー＿＿＿＿熊＿＿＿＿カプセルに映る紫＿＿＿＿踏み潰された父＿＿＿＿あの夜のこと＿＿＿＿揺れる精神＿＿＿＿返せ＿＿＿＿！

バリっと、何かが割れる音がする。
マグナル先生が慌ててノエルのカプセルを見ると、気絶したノエルと共に、ガラスにヒビが入り始めていて。
「止めろ!!!」
「は、はい!!」
レバーを慌てて戻す。
「さ、先にガラスが割れるなんて……」
「こいつはまだまだ魔力を持っていた……なんて逸材だ!」
「し、しかし。ガラスが……」
「関係ない！　まだ余りが2つあるだろう。それを使って元を完成させてから、修繕すれば良い」
「分かりました。では、また明日に?」
「ああ。明日、そして明後日。これでアルファベアーの第二試験を始められる……ふふふ、はははははは!!!」
目を覚ませば、先程の天井。
ノエルの記憶は混濁しており、ご飯を食べた後からがハッキリしない。カプセルに入

れられたのは覚えている。その後……
頭がずきんと痛む。何か思い出して欲しくなさそうな。そんな感じ。
部屋には窓がついていない。今は何時だろう？

同時刻。イリスとエリスの部屋。
「エリス、彼を利用したい」
「利用してここから出られるの？」
「うん。絶対」
絶対と断言するイリスの目は確かな意思を持っていた。
「どうやるの？」
「簡単。彼はアルファベアーを見た瞬間に、あのガラスを割るほどの力を放出した。しかも自我を失いながら」
「つまり。明日彼が再びアルファベアーを見た時に？」
「ううん。それだと、あいつらが止めてしまう。だから、明日カリプスと作戦を立てる」
「わ、分かったけど……彼はどうするの？」
「多分、彼が全部の魔力を出せばこの研究所ごと吹き飛ぶから」
「彼自身も巻き添えにってこと？」

「うん」
「そんなの……！」
「出来ないじゃないよ。やるしかないの」
「っ……」
エリスを抱きしめる。
「もう貴女の苦しむ顔を見たくない……だから、お願い……」
「……私は……」
複雑な表情をしているイリス。
イリスは少なくとも、ノエルを見殺しにすることは出来ないと思っている。
しかし、今まで受けてきた苦痛。これから受ける苦痛。目の前にいるエリスの苦痛に歪む顔はイリスも見たくない。
生まれてから一緒だったエリスを取るか。会って間もないノエルを取るか。
「分かった……分かったよ、イリス……」
「ありがとう、エリス」
再び強く抱きしめられる。
抱きしめられながら、エリスは覚悟を決めた顔をしていた。

トラウマ

翌日　食堂

昨日と同じく、４人で食べ始める。

すると、イリスがカリプスに話しかける。

「カリプス、昨日の数字当て。私ともやらない？」

「ん？　良いよ」

そういうと、カリプスはイリスの思考を読む。

「ん……？　……!?　イリ……」

ノエルはカリプスの顔が急に驚き、こちらをチラッと見たので、何事かと見返した。

「い、いやノエル。何でもない、気にしないでくれ」

イリス――どういうことだ？――

ノエルを利用して――ここから出る――

ど、どうやって？――

彼にも脱出の話を持ちかけて欲しいの――その用意の為に――夜中実験室に忍び込

む

ノエルは、数字当てをすると言いながらも、中々数字を言わないカリプスと、同じく難しい顔をしているイリス、そして何故か視線を逸らして地面を見ているエリスを変に思った。

でも何が変なのか、分からなかった。自分より前に居た3人だから、きっと何かあるのだろうと。だから、何も聞かなかった。

夜中

あの後ノエルは、カリプスから脱出する算段を聞いた。

まず、夜中に実験室に忍び込む。

そして、実験室にいる被検用の動物たちの檻を開ける。

動物はこちらに襲いかかるが、エリスの盾で4人を守る。

攻撃が効かないとわかれば、動物たちは研究所内に散らばっていき、あの2人は混乱する。

その隙に脱出する。

と、聞いていたのだが、来たのは何故か、カプセルが置かれたあの部屋。
さっきも来た。
そう、数時間前もここで魔力を取られ、また、あの熊を……熊を……

部屋に入るなり立ち止まるノエル。
それを見たカリプスが心を読む。
そして、イリスに目配せをする。
イリスはスタスタと歩いていき、アルファベアーの入ったカプセルを稼働させた。
ノエルの相貌に父が死んだあの光景が蘇る。
うぅ、あぁ。と呻き始めるノエルを尻目に、イリスはエリスに盾を出すよう指示した。
エリスはほんの少しだけ戸惑ったが、盾を展開した。
その中に3人が入る。
ノエルは呻きながら、段々と魔力を増幅させていく。

このまま――暴発すればこの研究所ごと――
イリスは盾の中から、ノエルを見る。
エリスもカリプスも。

ドアの側にいるノエル
そこから離れて中にいる3人
その後ろにアルファベアーのカプセル。
中には2回の魔力抽出により、かなり大きくなった熊がいる。次の抽出で、再びあの悪魔が生まれるだろう。

うぅぅぅぅぅぅぅ――――あアアアアアアアアアア――――

ノエルの全身から魔力が噴出し始めた。
魔力が部屋の壁に亀裂を入れ始める。

「……！」
その時、エリスが盾から飛び出す。

選択

「エリス!?」
ノエルに近づくと、ガシッと手を掴む。
「くぅっ！　……」
魔力が腕を伝わり、激痛が走り苦痛に顔が歪む。
「エリス！　早く戻って!!!」
イリスが手を伸ばすも、エリスは無視してノエルを引っ張る。
「ぐぐ……どっちも……助けたいっ……！」
エリスはそのまま盾を通り過ぎ、カプセルの中にノエルを押し込む。
その際、遂に壁が壊れ、研究所内に警報が鳴り響く。
「これじゃあ、あいつらが来ちゃう……！」

押し込んだ瞬間、カリプスがエリスの思考を読む。
そして、カリプスも盾から出て、カプセルの方へと向かう。
アルファベアーのカプセルの目の前にあるレバーを作動させる。

ノエルから魔力がアルファベアーに注がれる。
注がれて、注がれて、ノエルのカプセルのヒビが完全に割れる。同時に、アルファベアーのカプセルのガラスも割れた。
「お前ら!!」
若い男が慌てながら入ってきた。
しかし目の前に君臨したアルファベアーに、恐怖で一瞬体が固まる。
「行くよ!!」
イリスがその隙を見逃さず、2人を呼ぶ。
カリプスは反応したが、エリスはまだノエルを助けようとしている。
「まだ……まだ無くならないの……?」
しかし、エリスの想定していた策は潰れた。
ノエルの魔力を全部アルファベアーに吸い取らせ、そして自分の盾でアルファベアーの攻撃を一発防いで、混乱に乗じて逃げる。
しかし、魔力が一向に尽きない。
そして、アルファベアーはノエルに異常な量の魔力を与えられたせいで、錯乱状態に陥っている。
カプセルから出てきてから、吠えるばかりで、中々攻撃をしてこない。

「くっ……！」
若い男は、博士の到着を待つしかないと感じた。
あの熊は博士しか言うことを聞かせられないからだ。
「エリス!!　早く!!!」
アルファベアーがまだ攻撃をしてこないことと相まって、イリスは盾から出て、カプセルの前で待つエリスを引っ張った。
と、同時にノエルの魔力がまた暴発し、魔力を伝えていた管が爆発し、それがカプセルを動かしていたモーターに引火し、大きな爆発が起きた。
「きゃっ!!」
イリスとエリスは盾の方へ吹き飛ばされる。
盾のお陰で3人は無事だったが、ノエルは爆風に巻き込まれて、より部屋の奥へと吹き飛ばされてしまう。
「ノエル!!」
エリスがノエルを見捨てまいと、また盾から出ようとするがそれと同時にアルファベアーが、爆風によって正気を取り戻し、襲いかかってきた。
パリン――
爪が盾を襲い、一発で割れる。

「行きましょう!!」

脱出

イリスはエリスの手を強く引く。
もう、ここに居てはアルファベアーに殺されるだけ。
「おい！」
若い男が目の前に立ち塞がるが、研究者の彼は細身で痩せていた。
筋肉質のカリプスのタックルで簡単に転ぶ。腰を打ったのか、すぐさま立ち上がることができない様子だったので、２人はその隙をつき、その横を通り抜ける。そして、カリプスも後を追う。
「っ……待て!!　……っ!!??」
立ち上がって追おうとするが、目の前に大きな影が。
アルファベアーが男を踏み潰した。
そのまま、逃げた３人を追う形でアルファベアーは廊下を爆進する。
「くっ、追いつかれる！」
と、先の角から博士が走ってくる。
咄嗟にイリスは博士に言う。

「博士！　アルファベアーが!!」
「っ!!　……おお、おお!!」
カリプスはイリスの心を読む。
なるほど、あの博士はもう。
「行くぞ！」
３人が博士の横を通り過ぎる。
博士は３人を気に留めることもなく、アルファベアーへと近寄る。
「まさかこんなに早く完成するとは……!!」
そして、目の前の熊が己を引き裂いてもなお、高らかに笑っていた。

「あのドアの横!!　通気口から出れる!!」
システムはダウンしており、ドアは開かない。
が、ここに来てから少しずつ調べておいたおかげで、通気口にガタが来ていることを知っていた３人。

そして、通気口に入る。
後ろからはアルファベアーの大きな足音が聞こえてくる。

カリプスが通気口に入るのに戸惑っていると、アルファベアーが追いつく。
再び、その爪を振りかざそうとした瞬間。
後方が光り輝き、3人とも爆風で吹き飛ばされる。

空中に吹き飛ばされながらも、咄嗟に2人を掴んだエリスは、盾を展開する。
もうボロボロだが、空中から森へと墜落する位は耐えられるだろう。

そしてその空から、研究所が大きな爆発をするのを目撃した。

「ノエル……っ」

そのまま3人は、森へと墜落した。

少し戻って、アルファベアーが盾を割った時
ノエルは未だ魔力が放出されている。

自我はなく、ただただ放っている。
そして、どんどん周囲が爆発に巻き込まれていく。
爆炎に飲まれながら、ノエルは最後の放出をした。
それは、周囲の部屋全てを焼き切る大きな爆発になり、そのまま研究所ごとノエルは吹き飛んだ。
3人とは違った方角へと吹き飛ばされたノエル。
そのまま森へと吹き飛ばされていく。
そして、彼はまだその暴発した魔力の残滓を纏ったまま、隣国「聖都ヴェルファイア」との境界とされる、バリアウォールを突破した。

聖都

聖都ヴェルファイア　辺境　アーロン邸

「アーロン様」

「うん、久しぶりの侵入者だね」

かなり高級なイスに座りながら、目の前にいるメイドに対して応答するアーロン。

「ナスカ。君が行ってきてくれ」

「分かりました。行って参ります」

メイドは一礼をすると部屋から出て行く。

聖都ヴェルファイア　バリアウォール付近

「あれは……!?」

ナスカが近づくと、そこには倒れている少年の姿が。

アーロン邸にて。

「彼は？」
「魔力をかなり使ったみたいでした。後は多少の火傷を負っていましたが、治療できています」
「良かった、ありがとう」

翌朝

目を覚ますと知らない天井だった。
そして、1人の女性がこちらを見ていた。
「目覚めましたね」
「……誰……？」
「私はナスカ。怪しいかもしれませんが、私が気絶していた君を助けたんですよ？」
「……ありがとう……ございます」
「うん！お腹は空いてる？」
そう聞かれると途端に意識してしまう。
ぐうぅぅと腹が鳴った。

「あははっ、用意してくるから待っててね」
部屋から出たナスカは、ご飯の用意と同時にアーロンに目覚めたことを伝える。

コンコン

部屋のドアが開くと、美味しい匂いと共にナスカとアーロンが入ってきた。
「こんにちは、私はアーロン。この家の持ち主だ」
こくりと頷く。
「ご飯を食べながら聞いていてほしい」
そう言うと、ナスカがご飯の入ったトレーを置いた。
手を合わせて食べ始める。
「君が何故バリアウォールを超えてこれたのかはなんとなく分かる。リッテンのあの研究所が爆発した事と関係があるのだろう」
アーロンも椅子を持ってきてそこに座る。ナスカはその斜め後ろに立つ。
「まぁ、あちらの国で起きたことは深くは聞かない。ただ、君をこの後どうするかについて、話さなければいけない」
ご飯を食べながら、耳を傾けていたが、ふと母の顔がフラッシュバックする。

「お母さん……」
静かに続きを聞くアーロン。
あの研究所絡みなら、親と何かしらあるだろうと踏んでいる。

オーヴェン達に攫われたあの日。
ノエルの母アリアは、地下で鎖に繋がれていた。
オーヴェンは、アリアに何か秘密があると考えた。アリア自身にもノエルにも、魔力があり過ぎるからだ。
その謎を解き明かすまでは、アリアを売り渡せない。もしかすれば、オーヴェン一派の戦略を強くすることも出来るかもしれないからだ。もう、あんな金の亡者に仕事を頼んでいては大変だ。
だから、子供を研究所に売り渡し、それを人質として、暫く監禁することにした。
アリアは、ノエルが無事ならと、抵抗はしなかった。
あまりにも抵抗しなかったのが気になるが。
そして、ノエルにはお前が変なことをしなければ母親は死なないと脅した。まぁ、12のガキだし、魔力が強いだけで、本人はなよなよとした奴だった。恐らく変なことは

しないだろう。

　と、思っていたはずなのだが。

「研究所が爆発しただと!!?」

「はい。収容していた子供達全員消息不明です」

「おいおい……」

「アリアにどう説明しますか?」

「説明しないさ。何が起きているのかも分からないのだから、生きていると情報を与えるだけ。それより、早くアリアは何者なのかを突き止めてくれ」

「かしこまりました」

親

「お母さんは無事……？」

ノエルの口から出てきたのは親を案ずる言葉。

ふむ――――

「無事と言いたいが、君がどう言う状況にあるかが分からない。話したくない部分は話さなくていいが、教えてくれないか」

ノエルはご飯を食べてながら、こくりと頷いた。

説明中。

「なるほど。君が大人しくしていれば母親は無事だと……そして、今君は大人しく出来ていないから……ということか」

「君の住んでいる村だと、グランドさんだね。前に一度だけお会いしたことがあるな……ナスカ」

「はい」

「グランド家を調べて欲しい」
「かしこまりました」
　ナスカが部屋を出る。
「ノエル君、オーヴェン・グランドは使えるものは何でも使おうとする性格だ。だから、恐らく脅されたと言うことは、母親は使えると判断されている。君が何かをしたとしても、多分彼は母親を殺さないよ」
　そう聞くと少しだけ安心したような顔になる。
「まぁ、数日もすればナスカから何かしらの情報が届くはずだから、数日我慢してくれ」
　コクリとノエルは頷く。
　それと同時に朝ごはんも食べ終わった。
「よし、じゃあ次はこれからの話をしたい。ついてきてくれ」
　そうして、下へと降りて行く。
　リビングのような場所に行くと、そこに1人の女性が座っていて。
「あら、貴方がノエル君ね。初めまして、アーロンの妻、アズランです」
「……は、初めまして……」
　ぺこりとお辞儀をする。
「ここに座ってくれ」

ノエルが座る。
向かい側にアーロン夫妻が座る。
「長々と説明しても分かりづらいだろうし、簡単に説明するよ」
「まず、君をオルトリンデ村。生まれた場所に返すことは望ましくない。君を研究所に売り渡したと言うことは、グランド家としては、書類上は君は死んでいることにされているはず。村に帰ればそれが村人や他の村にバレる。そうすれば、証拠隠滅の為にグランドは何をしてくるか分からない」
「加えて、君の母親を生かす為にも、下手に君は動きを見せない方が良い。それこそ、本当に死んだと思わせるくらいでも良い。その為になんだが……」
アーロンはそこで一呼吸入れる。
「これは、私達の我儘も入った話になるが、聞くだけまずは聞いて欲しい」
「君の親代わりにならせてくれないだろうか」
「!!?」
「……まず、表向きの理由としては、リッテン王国に君を返せば、いつかは存在がバレる。

だから、ここ。聖都ヴェルファイアで、君を匿いたい。いつか、君の母親を奪還する為にも、まずはほとぼりが冷めるまで、隠れているのが良いと考える」
「私も貴族だ、それにこの国では……そうだな。まぁ中の上程度の位置付けにいるから、子供1人を匿うくらいなら何とでもなる」
「と、言うのが表向き。そして、本心としては、私たちは子供がいなくてね」
そういうと、アズランの顔が暗くなる。
「居ないというか、出来なくてね。だから、君の親代わりになって、自分達も子供を愛したいんだ……」
言葉に詰まりながらも話をするアーロン。

でも――でも――僕のお母さんは――お父さんは――違う！

目指すべきもの

「ノエル君！」

ガタンと椅子から飛び降りると、玄関に向かって走って行くノエル。
ドアを開けて外に出る、花が沢山の庭を走り抜け、門の前に辿り着いた所で、目の前にナスカが現れて、走るノエルの手を握る。

「待って！」

「確かに！あの２人の我儘、エゴだと思うの。でも、でもね。貴方がこの国で、１人で生きていける訳がないの！そもそも、無理矢理壁を突き抜けてきたから、貴方は不法入国。街に行けば、一瞬で捕まってしまう。そしたら、母親に会うなんて叶わなくなっちゃう！」

ナスカが何かを言っている。

内容はノエルには届いていない。
でも、握られた手の暖かさ。そして必死に繋ぎ止めようとしてくれる優しさ。
それは、どこかで。

イリスが手を伸ばすも、エリスは無視してノエルを引っ張る。
「ぐぐ……どっちも……助けたいっ……！」

自我が何かに乗り込まれて行く中で、あの暖かさを感じた。
それは、母に抱きしめられている時の安心感と似ていて。嘘偽りない優しさが染み込んで。
「戻ろっか」
ナスカは優しい口調でノエルに言う。
こくりと頷き、手を握りながら戻って行く。

玄関から、アーロンとアズランも飛び出してきていた。

「ノエル君！すまなかった！君に、私たちの理想を押し付けてしまった……」

頭を深く下げるアーロン。

「ごめんなさい。私が、アーロンにお願いをしたの。本当にごめんなさい。でもね。貴方を匿いたい気持ちは本当、貴方が私たちを嫌ってもどう思っても良い、これは私たちのエゴだから。ただ、ノエル君は、この家で暮らしていて欲しい。私たちが絶対貴方と母親を救う手立てを考えるから」

アズランは膝を突き、ノエルと視線を同じにしながら、訴えた。

「うん……まだ……親とか、わからないけど……でも……お世話になります……」

ノエルは、ペコリとお辞儀をした。

アーロンとアズランは涙を流しながら、ノエルの手を引き、家へと招き入れた。

1週間後

「ノエル君、君の母親アリアさんは、まだ生きている」

少し遅れたが、生存の知らせがノエルの耳に入る。
安心した顔で、頷くノエル。
「だがやはり、グランドの元に居る。取り戻すのは難しい」
ノエルは数日前にリッテン王国と聖都ヴェルファイアの関係性について聞いていた。
隣の国であるが、関門以外にはバリアウォールと呼ばれる、不法入国を防ぐ壁が貼られている。（ノエルはその壁を自分の暴走した魔力のせいで貫通したが）
交易は為されているが、リッテン王国は「自由」を重んじている。聖都ヴェルファイアは「平等」を重んじている。その方向性の違いが、決して仲良しにはなれない原因となっていた。
例えば、商業一つとっても。
リッテンは、どんな立場でも誰でも自由な物流がなされている。だから、裏側も多ければ、不利益を喰らおうと自分たちの責任となる。自由的な放任と言ったイメージ。
ヴェルファイアは、商人にも階級を分けている。そして、階級ごとに明確な機会が設けられている。その中でやり取りを行い、何かしらの不利益を被った場合、国がそれをある程度は補填してくれる。平等な機会があると言ったイメージだ。
国の方向性が違う。
だから、交易以外で国を往復するのは、冒険者くらいである。後は国間の会議であっ

たりする場合か。
だから、ノエルは現在不法入国状態である。
そして、今日。アーロンによって、ノエルは養子縁組として聖都ヴェルファイアの戸籍となった。
どうやったかと言われれば、まぁヴェルファイア内でも、ＴＯＰ５と呼ばれるほどの情報通のナスカにかかれば造作もない。それなりの金は積んだが、そこはアーロンパワーで。
そして、アーロンは以前中の上と表現していたが、ヴェルファイアには明確な階級分けがある。
下からＣ．Ｂ．Ａ、その中でも３段階に分かれており、また特別級のＳが存在する。
アーロンはその中でＡの３、Ａクラスの３番目である。
Ａクラスの貴族は基本的に街の中心部に住むはずだが、アーロンは自ら辺境の山沿いに住んでいる。
ヴェルファイアの養子になったノエル。ただ、規則で同国で５年間は国外へ移動することが出来ない（貴族などに特例はあるが）。
つまり、１２歳のノエルは、１７歳になるまで、国外へ移動することが叶わない。
長いとは思うが、これが１番安全な方法である。早とちりをすれば、もし母親を運良

く奪い返せても、王国か聖都か、どちらからか追われる身になるだろう。
１７歳という若さ。そこで王国へ安全に行く為には、ただ一つ「冒険者」になる。
それだけだ。

修行

「だから、今日からヴェルファイア学園に入る為に、勉学と魔法の訓練をしよう」

独学で王国へと入国することができるレベルの冒険者になるには、一般レベルからなら２０を越えなければ厳しい。

ノエルは幸いにも、魔力は常軌をいしている。足りないのは、その心の弱さ。そして、これはまだ仕方がないが、勉学のレベルである。農村の子供であるから、かなりレベルは低い。

心の弱さを鍛えるには、やはり同年代の子との関わりが必要。心が強くなれば、感情の起伏があったとしても、自分の力をコントロール出来るようになり、その力を存分に使えるはずだ。

と。言うことで、ノエルの勉強＆ａｍｐ；魔法の修行の日々が始まった。

勉強は、アーロンと妻のアズランが。

魔法は、ナスカともう1人のメイドさんであるクナが担当した。
ヴェルファイア学園は、15歳で入学可能になる。あと3年。

ノエルは勉学の方はかなり順調に進んでいた。教えられることが嫌いなわけでもなく、飲み込みが遅い訳でなかった。
自分の意見を言わない方なので、国語などの勉学が少し難しいかも思われたが、自分の意思と国語の自分の解答には何かしらの違いがあるのか、そこまで詰まることもなく頭を鍛えていった。
問題は魔法の修行である。
ナスカ、クナ。共にかなりの腕を持っていて、普通の生徒を教えればかなりの腕までは達する見込みである。
しかし、ノエルは自分の魔力をコントロールすることが難しく、感情の起伏でそれがすぐ0%から100%になり暴発してしまう。
魔法以前に、自分の魔力を少しでも良いから操れるようになる必要があるので、まずは魔力のコントロールから始まった。
「ノエル君！まず目を閉じて」
言われた通りに目を閉じる。

「自分の中を巡る魔力を意識して」
体に意識を向けてみると、何となく。何かあるような感覚になる。
「それを今度は自分の手に集めるイメージをしてみて」
この何かを手に……手に……
「……ストップ!!」
ナスカが慌ててノエルの手を掴むが、ノエルの手を集めた魔力が大きすぎて、その場で爆発を起こす。
「きゃっ!」
ナスカとノエルはお互いに反対側に吹き飛ばされる。

「!!」
少し離れた位置から見ていたクナが慌ててノエルに駆け寄る。
「ノエル君!」
爆発した手を見ると、傷つき血が出てきていた。
「大丈夫!すぐ治すから!」
そういう時クナは、治癒の魔法を唱える。
すると、ノエルの手は傷一つない綺麗なものへと再生した。

「これは難航しそうね……」
ナスカは吹き飛ばされ、木にもたれながらそう呟く。

1章　学園一年目
物語は動く

修行に明け暮れるある時、アーロンがノエルに説明する。

「ヴェルファイア学園には入学試験が存在するんだ。筆記試験と、魔法試験の２つ。それぞれ満点が５００点で最大１０００点。最大満点で合格した人は居ないけど、片方満点だった人は存在する」

驚くノエル。

「恐らくだが、君が入学する時も定員は５００人だろう。そしてその５００人に入るために必要な点数は、大体だが……このくらいだ」

総合得点　６００点以上

「幸いな事に、総合された得点で判断される。ただ、片方が低すぎればダメだ、最低点１００点取れていれば恐らくは大丈夫だとは思う。一応前例があるからね。今の感じを見ると、ノエル君は筆記試験で満点を取る勢いでないといけない。今の君がしっかりと

コントロールできる量の魔力で挑めば、魔法試験では恐らく最低ラインの１００点をギリギリ超えるかくらいだから。流石に誰かに君を怒らせてあの魔力をぶっ放せば、５００点貰えるかもしれないが、危険すぎるからね……」

「と言うことで、これからは筆記試験の方を重視して教えようと思う。魔力の方は、僕らも専門家ではないからね、やはり学園に入ってから詳しいことを学んでいけば大丈夫さ」

そうして、３年が経過した。

ノエル１５歳。

４／１　ヴェルファイア学園の入学式だ。

と言っても、席に座ってあーだこーだ話を聞くだけの退屈な時間だが。

アーロン邸から、ヴェルファイア学園に直接通おうとすれば、相当な時間が掛かってしまう為、ノエルは寮を選択した。

今日、自分の部屋が分かる。そして、その部屋で３年間共に過ごすパートナーも分かる。

朝早くにアーロン邸を出発する。
玄関には、アーロン夫妻と2人のメイドが見送ってくれた。
「行ってらっしゃい、君なら大丈夫だ」
「何かあれば私達に連絡をしてね。きっと助けになるはずだから」
「友達沢山作ってね！大事なのは思いやりの心だよ！」
「貴方のお母さんを助ける為にも、全力で頑張って！」
エールを受けながら、ノエルはアーロン邸を出た。

ノエルの母アリアはまだ生きている。
相変わらずオーヴェンの元に居るが、一昨日ナスカが生存の確認を取った。
まだ、救える。
後2年。17歳になり、ノエルが聖都ヴェルファイアにて、完璧な戸籍を獲得して、同時に冒険者となり正式にリッテン王国へと乗り込む。その筋書きは未だ崩れそうにない。

聖都ヴェルファイアの中心部へと入る。
ヴェルファイア学園は、聖都の中で一番レベルの高い学園で、唯一Bランク以下の貴

族たちが住む住宅域と同じ枠組みに存在している。
商店などで賑わう大きな通りを真っ直ぐ進めば、学園に突き当たる。
はずなのだが。
「……ど、どうしよう……」
何故か迷っているノエル。
大通りの人混みに気圧され、そのまま人を避けるように違う路地へと入り、違う通りへと出てしまった。
そして今は公園の噴水の前で周囲を見渡しながら困っている。
と、そこに1人の女性が話しかけてきて。

出会い

「おい、どうしたんだ？」

ノエルが声をかけられた方を見る。

そこには、藍色の短髪に赤いメッシュが入り、肩に大剣を背負った女性がこちらを見ていた。

「え……いや……その……」

「ん？迷ったのか？」

地図を持ち、キョロキョロしていた事から恐らく迷ったのだろうと推測した。

「私も今から行くところだし、一緒に行くか」

ふと。

その子が時計を見る。

８：２５

「やべ！急ぐぞ!!」

腕を掴まれそのまま引きずられるように、学園へと向かって行った。

何とか遅刻せずに到着した２人。
「ふぅ……危なかったな。あ、私はレネ。よろしくな」
手を出される。
「ぼ、僕はノエル……です……」
その手を恐る恐る握ると、ガシッと掴まれブンブン振られる。
「それじゃ！」
振り終えると、レネはそのままノエルとは違う教室へと向かって行った。

ヴェルファイア学園。
今年の入学生、全５００名。
全校生徒１４６０名。
１年生はＣクラス、２年生はＢクラス、３年生はＡクラスに別れている。
その中で入学成績上位の１０名は特別クラス（＋クラス）に入ることが出来る。
先程助けてくれたレネは、Ｃ７位。
１年生の中で特別クラスを含めても、１７番目に成績が良かった。
ちなみにノエルはＣ４８８位。
合格ラインギリギリを潜り抜けてきた。

クラスは一応５０人ずつで分かれている。
しかし、このクラスは一応の集まりのためほとんど顔を合わせることはない。
基本的に、それぞれが取る授業に向かうからだ。
同じ授業内容でも週に何度もコマが存在しており、自分の好きな時間に必須科目を入れることができる。

クラスにて挨拶、入学式を終えると、まず寮に向かう。
予め送った荷物が既に届いているはず。
ノエルが２人部屋をノックすると、中からどうぞと、男性の声が聞こえた。
「し、失礼します」
恐る恐る部屋へ入ると、
片方のベッドの上で、届いた荷物を整理している男の姿が。
「君がノエル君か。俺はシン。よろしくね」
本日２度目の握手を交わす。
悪い人じゃなさそうなので、ホッと一安心したノエル。
シンはＣ＋３位であることは知らずに。
１日目はそのまま終了した。

４／２
今日から授業が始まる。
座学や実践的な授業など様々なものがある。
ノエルは実践面で問題が多いため、自由に取れる授業はこちらを多めに取ることにした。
１時間目、一番最初は基礎体力を上げる授業。
先生が現れ、まず３人１組を作れと言う。
ノエルは、シンと共に寮から出て来ていた。
この授業はシンも一緒に受けるからだ。
もう１人をどうしようかと考えていると、後ろから声をかけられた。
「あ」
「よう」
そこには前日、迷いのノエルを助けてくれたレネの姿が。
「私の所のルームメイト、この授業取ってなくてさ。良かったら一緒に組まない？」
ノエルはシンを見る。
「僕はシン、君はレネだね」
シンはこの学年全員の顔と名前を覚えている。

ノエルはなんで知ってるの？と不思議な表情をすると同時に、レネは驚いていた。
「ノ、ノエル……！まさか、この人がルームメイト？」
こくりと頷く。
「凄いな！……てか、この人誰か知ってる？」
同学年であることしか分かっていない。
と、シンが笑う。
「ははは っ。ノエル君はやっぱり知らなかったか」
何のことだろうと首を傾げるノエル。
それを見てレネが言う。
「この人は、この国の現宮廷魔法団長の次男だぞ！」
そう、シンはこの聖都ヴェルファイアにおける。最強の戦闘集団である、魔法団の団長を務めている、ネックスの次男であった。
つまり、長男を除けば2番目に団長の座に近い男で、その分実力も凄くて……
「一応言っておくけど、今C＋3だから、強さにはそこそこの自信はあるよ」
そう言われたノエルは、ただただ凄いなとしか思わなかった。
「ノエル君らしさだね。でも、こうしてビクビクされない方が、無理に尊敬されない方が、僕は好きだな。本当に君たちと関わりたくないと思うなら、学園に入ってないだろ

うし。僕は、肩書きこそ凄いものなのかもしれないけど、普通の人間、普通の学生として生きていきたいんだ。今はね」

「そっか、んじゃ、私も普通に接するな」

「ああ、それで良いよ」

でもお前はもうちょっと驚け！とレネに背中を叩かれたノエル。

きっと、この国で生まれてたら、この国にもっと興味が湧いたら、驚いてたかもしれない。

ノエルの心はまだ、オルトリンデ村に、母アリアの元にあるのだろう。

早速

その後の授業は難なく進んだ。
時折、シンやレネと同じになることがあったので、その時は一緒に受けた。
全部、ノエルを見つけて2人が声をかけて来てくれる形式だが。2人はそれを嫌がってはいない。
むしろ、1人にしておくと頼りないノエルを支える。さながら親のような気持ちもあるのだろうか。

4／7
1週間が経過した。
寮の生活にも慣れ始め、授業も段々と本格化していく中の出来事だった。
放課後、6時間目をノエル、シン、レネの3人で受けたため、そのまま学内を歩いて寮へと向かおうとする。
ヴェルファイア学園には、部活動がある。

入るかは自由で掛け持ちも自由。
シンは将来を見据えて、料理部に入り、料理を学んでいる。
レネは筋トレ部に入り、普段の授業に加えて更に筋力を上げようとしている。
ノエルは何も入っていない。
そんな3人が揃って寮へと帰れる日は、週の中でもこの日くらいしかない。

と、目の前から3人の男がやってきた。
こちらを見ながら、何故かためらうように近づいてくる。
シンが居るからやはり気になってしまうのかなとノエルは思う。
シンもそう思ったのか、自らは一歩下りレネに対応を任せることにした。

「どうした？」
「え、えっと……」
なかなか言い出せない。
「あ、もしかしてシンが居ると気まずいとか？」
「い、いえ!!そんな訳では!!」
と、真ん中の子が狼狽えている間に、その右横の子が携帯端末を差し出しながら。

「け、決闘を申し込みます！」

決闘。

ヴェルファイア学園に在学している中、一度のみ使用可能。

個人戦からチーム戦まで対応されており、戦闘を行う双方の合意があればいつでも戦える。

戦う場所は学園内のスタジアム。観客は無し。

そして、決闘に勝ったチームは負けたチームのランキングまで上がることが出来る。

つまり、決闘は格上に対してしか行うことが出来ない。

現在挑んできた３人組のランクはこう。

Ｃ８７

Ｃ２６０

Ｃ４０５

チーム戦なので、ノエル達３人より総合力は格下となる。

ただ。

「本当に良いのか？言っちゃ悪いけど、勝てるとは思えないぞ」
レネが忠告する。
Ｃ＋３のシンが居る時点で、相当な実力差になっている。
ノエルが一番弱いからと言って、チーム戦ではカバーし合えるため、結局はシンに良いようにされてしまう可能性が高すぎる。

「だ、大丈夫です……！ですので、ノ、ノエルさん！よければ合意を……」
ノエルに携帯が差し出される。
ノエルは不安になって、レネとシンを見る。
「まぁ、私は良いぜ。手加減はしないし」
「僕も、彼らがどんな理由で挑むのかは分からない。でも、ここまでして言ってきてるんだから、受けなきゃね」

そう言われて、不安こそあれど２人がいるからと、自分の指紋認証や顔認証を済ませて、合意のボタンを押そうとする。

ジ――――――――

自分の指紋認証や顔認証を済ませて、
申込のボタンを押そうとする。
押した。
「あ、ありがとうございます……ご、ごめんなさい!!!!」
突然目の前の３人が謝り始めた。
困惑するノエル達。

決闘へ

すると草陰からまた違った3人組が出て来た。

「ご苦労さん！それじゃ、その端末返せ」

一番前を歩いていた男が、持っていた端末を奪う。

「お前らもう帰って良いぞー」

そう言うと、最初に来ていた3人組は怯えるように逃げ去った。

「君たちは……」

シンが驚く。

驚くのは無理もない、草陰から出てきた3人組はシンと同じ、C＋クラスの4・5・9位のザナード、バーデン、ギアラだったからだ。

「いやぁ、どうもどうも。シン様。それに取り巻きのお二人さんも」

「っ……取り巻き？」

「まあ、今回はお前らに恨みは無いんだけどさ。近くにいたから巻き込んじまった」
「おい、さっきの子から端末を奪ったのは何故だ？」
「あ？それ俺のだから。そうそう、決闘申込ありがとさん」
シンとレネ、ノエル全員が驚いた顔をする。
「ど、どういうことだ？」
「そのままの通りだが？あいつらが、俺の端末で、そこのなよなよした男に決闘申込をしてもらったわけ、そっちからな」

決闘の申し込みは、双方の端末から可能である。
勿論、その前に顔認証、指紋認証など、本人確認が必要なのだが。

レネがノエルに言う。
「おいノエル！合意じゃなかったのか！？」
そう、先程は格下が相手だった。だから、こちらから申し込む事はできない。
「わ、分からない……合意を押した……はずなんだけど……」
ノエルも混乱していた。
たしかに、合意しますかという選択だったはず。

その様子を見て、何かに気づくシン。
そして、うんうんと頷くバーデン。
「流石だなバーデン」
ギアラがバーデンを褒める。
「ははは、だろ？」

「君たち……いや、バーデン君。端末がノエル君に渡った後、認識操作をしたね？」

そう、バーデンは他人の認識を操作することが出来る。
それも、ノエルのような心が弱い人であればあるほど。催眠術のようなものだ。
そこに漬け込み、合意を押す瞬間、画面を切り替え申込にした。しかし、ノエルは合意を押していると思ってしまっていた。
と言う訳だ。

「証拠は？」
「ない」

「なら、そんな不確定な質問は辞めておきなよ。時間の無駄だ」

「おい、そんな事より決闘すんぞ」

意気揚々というより、殺意に満ちた目でこちら側を睨みつけてくるザナード。

ザナードはすでにやる気満々だった。

「どうにもならねぇのか？」

チッと嫌そうな顔をしつつも、少し考えた顔をするレネ。そして、レネがシンに言うが、シンは諦めろと言わんばかりに首を振る。

「やるしかない。勝てばそれで良いんだ」

戦闘開始

決闘スタジアム

「ルールは３ｖｓ３のチーム戦、禁止行為は相手の殺害。これだけだ」

スタジアムには、生命探知機が備わっており、もし戦闘している生徒に命の危機が発生すれば即刻試合が中止され、一瞬で医務室へとテレポートされる仕組みが整っている。

では、一撃必殺であればどうかと言うと。

決闘開始時に、言うなれば残機を＋１して貰った状態を得る。

即死の攻撃を喰らっても、データ上でその攻撃が判定され、ただちに戦闘は終了、もしくは食らった選手は棄権退場となる。

どちらも、死に至る事はないシステムになっている。

「ノエル、お前は後方支援だ。良いな？」

レネが言う。

「そんで私とシンで３人を相手にする」

シンが戦闘体制に入る。
ノエルも後方から自分が制御できる分の魔力で、魔法を打ち２人を援護する。
「それじゃ、始め！」
ザナードがシンに向かって攻撃を開始する。
「パワーウェーブ！」

同時にギアラとバーデンがレネへと向かっていく。
「ひっ！」
ノエルが仰け反り、尻餅をつく。
その声に反応し、レネが振り向くがギアラの大剣を防ぐので精一杯だった。
「お前の相手は俺だ。同じ大剣使い」
「ちっ……」
ノエルには幻覚が見えていた。
正しくは認識阻害が入っていた。
レネに向かったはずのバーデンがこちらを向き、一瞬にして眼前へと迫ったからだ。

しかし実際にはそんな事はなく、バーデンはギアラとレネの鍔迫り合いを通り抜けて、漸く尻餅をついたノエルの元へ。

「アイスウォール！」
パワーウェーブを氷の壁で防ぐシン。
ザナードは火属性、シンは氷属性の使い手だ。
「氷ねぇ……溶かし尽くしてやるよ」
ザナードは先ほどよりも大きな炎を作り出す。
「ファイアボール！」
人ほどの大きさはある炎球が３つ、シンへと迫る。

「お前みたいに何度も引っかかってくれる奴……久しぶりだ！」
接近したバーデンは右足を蹴り上げる。
咄嗟にノエルは自分体の左側を守ろうとする。

「ぐぅっ!?」
ノエルの右脇腹にバーデンの左足が直撃する。
「何回引っかかってくれるのか楽しみだ!」
倒れ込むノエルに今度はかかと落としを仕掛ける。
「う……らぁ!!」
ガキィィンと音を立て、ギアラを弾き飛ばすレネ。
反動で一瞬空中に浮く。
その隙を見逃さず、ギアラは剣を杖代わりに自分の体を無理やり前に向け、爪先でレネの顔に蹴りを入れる。
「がっ……!」
浮いた状態で攻撃を避けれず食らい、同じ方向に力が加わり、着地後2歩ほど後ろへと下がる。
その間にギアラは、足を地面に下ろしながら、後ろへ構えた剣を振り上げる。
「間に合わ……!」